

中学校で再読：「大造じいさんとガン」

—「戦い描写」の読みから主題に迫る—

しづたに学園 池田市立秦野小学校
山 際 博

はじめに

小学校国語には、名作とよばれる物語教材がいくつもある。1年「おおきなかぶ」「たぬきの糸車」2年「スイミー」「スーホーの白い馬」、3年「ちいちゃんのかげおくり」「モチモチの木」、4年「一つの花」「ごんぎつね」、5年「大造じいさんとガン」「わらぐつの中の神様」、6年「やまなし」「海の命」などである。

中学生にとって、これらの教材は、小学校時代にそれぞれの発達段階に応じた比較的やさしい表現で叙述されているもので、再び学習することはまったく想定されていない。しかし、これらの教材は叙述はやさしいかもしれないが、その主題は、中学生のみならず、大人にとっても普遍的な内容をもっている。たとえば、「おおきなかぶ」や「スイミー」は「弱者」同士の協力の物語、「ごんぎつね」は、寂しさを抱えたもの同士のディスコミュニケーションの物語である。また、「わらぐつの中の神様」は、「働くことや人間として何を大切にすべきかという人間観や労働観」を考える物語であり、「海の命」は少年が困難を乗り越えての成長する物語である。

私は、小中一貫教育の本格実施の中で、小学校での授業研究会への参加を通して、小学校教材を中学校で再読することに意味があるのではないかと思いはじめた。小学校でそれぞれの発達段階で学習した教材を、中学校で再読することは、成長した目で小学生時代の読みを深めたり、新たな解釈で作品を読み込むことができると考えられる。そして、やさしい叙述から深い認識を問うこともでき、中学校での新しい授業を創る可能性もある。それには、まず、中学校教員が小学校の国語の授業に学ぶことが重要な取り組みであろう。

本稿では、私がこの一年間で、出会った授業研や授業記録、子どもの学習ノートから学んだ小学校五年の教材「大造じいさんとガン」の授業から、特にクライマックスに課題を焦点化し、中学校での小学校教材再読の意義を考えていきたい。

[1] 「大造じいさんとガン」とは

「大造じいさんとガン」は、椋鳩十が『少年倶楽部』（昭和十六年十一月号）

に初めて発表し、その後、何度か改稿された作品で、現在小学校五年生のすべての国語教科書に採録されている名作教材である。

四つの場面で描かれたこの物語の概要は次のとおりである。

<第一場面>

大造じいさんは、この辺りではベテランの狩人であった。この大造じいさんが狩場に使っていた沼地にはガンの群れが毎年飛来していた。しかし、いつのころからか残雪という知恵者のガンの頭領が群れを率いるようになってから一羽もガンを手に入れることができなくなっていた。

そこで、大造じいさんは、ウナギ釣り針でガンを捕まえる作戦を試みるが、残雪に見破られ、失敗してしまう。大造じいさんは、残雪をいまいましく思っ
てはいたが、その知恵に対し、感嘆の声をもらしてしまう。

<第二場面>

次の年は、夏のころから準備したタニシを使って、ガンの群れをおびき寄せ
て仕留める作戦を行おうとしたが、これも残雪の知恵によって前年と同様、失
敗に終わる。大造じいさんは、その知恵に感心しながらも自分の作戦をことご
とく見破る残雪をますますいまいましく思った。

<第三場面>

残雪との戦いも3年目になった。大造じいさんは満を持して、最初の年に生
け捕りにしたガンをおとりにして、ガンの群れを仕留める作戦を考案した。万
端の準備をして、いよいよ作戦を開始しようとしたその瞬間、ガンを餌にする
ハヤブサが、その群れを急襲した。これに対し、残雪は機敏にも実にすばや
い動作でハヤブサの目をくらしながら、飛び去り、見事に危機を回避した。と
ころが、野鳥の本能がにぶっていたおとりのガンが逃げ遅れて、ハヤブサに襲
われ、その餌食になりそうになる。その危機一髪の事態に、ハヤブサから遠く
逃げ去ることに成功したはずの残雪が単身帰来し、仲間を救うためにハヤブ
サと命がけの死闘を繰り広げる。そして、その犠牲的行為は見事成功するが、
残雪は、深く傷ついてしまう。しかし、第二のおそろしい敵（狩人大造じいさ
ん）の姿を見た残雪は、最期の時を感じても、頭領としての威厳を傷つけまい
と堂々とした態度で、大造じいさんに対峙した。大造じいさんは、その残雪の
姿に強く心を打たれた。

<第四場面>

大造じいさんは、手負いの残雪を一冬、治癒のために保護した。ある晴れた
春の朝、快癒した残雪を大造じいさんは、北の空へ解放した。そのとき、大造
じいさんは、残雪に「ガンの英雄よ。おれはひきょうなやり方はしない。今年
も堂々と戦おう。」と呼びかけ、北へ北へ飛び去っていく残雪をいつまでも見
守っていた。

[2] 小学校ではクライマックスをどう教えるか？

「大造じいさんとガン」のクライマックスは、大造じいさんと残雪の戦いの場面ではなく、残雪がハヤブサと死闘を繰り広げる第三場面である。ここは、大造じいさんの残雪への見方が「いまましい敵」から「ガンの英雄」に大きく変容する場面である。しかもその変容は、ハヤブサとの死闘、そして第二のおそろしい敵との対峙という極めて短時間に発生した残雪の命がけの戦いを大造じいさんが目の当たりにする中で起こったものである。つまり、残雪とハヤブサ、そして人間との戦いの実像を読み解くことが、「大造じいさんとガン」の主題に迫ることになると考えられる。

1. 小学校での読み

では、この課題に迫る小学校の読みを紹介したい。

おとりのガンを見つけたハヤブサが、ガンを襲う場面から大造じいさんの残雪像の変容は始まる。当該場面の本文は次のとおりである。

ハヤブサは、その道をさえぎって、バーンと一けりけりしました。

ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。ガンの体はななめにかたむきました。

もう一けりと、ハヤブサがこうげきの姿勢をとったとき、さっと、大きなかげが空を横切りました。

残雪です。

大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。が、なんと思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。

残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間のすがたがあるだけでした。

いきなり、敵にぶつかっていきました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい相手をなぐりつけました。

不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめきました。が、ハヤブサも、さるものです。さっと、体勢を整えると、残雪のむな元に飛び込みました。

ぱっ

ぱっ

羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。

そのまま、ハヤブサと残雪は、もつれあって、ぬま地に落ちていきました。

大造じいさんはかけつけました。

二羽の鳥は、なおも地上ではげしく戦っていました。が、ハヤブサは、人間のすがたをみとめると、急に戦いをやめて、よろめきながら飛び去ってしまいました。

残雪は、むねの辺りをくれないにそめて、ぐったりとしていました。しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げました。そして、じいさんを正面からにらみつけました。

それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでありました。

大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじたばたさわぎませんでした。それは、最期の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをきずつけまいと努力しているようでもありました。

大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対してのような気がしませんでした。

小学校では、物語の主題に迫るためにこれまでさまざまな授業実践が生まれしてきた。その中で最もよく使われてきた発問が

「大造じいさんの心情が大きく変わったところはどこですか？」

「大造じいさんの残雪への見方が大きく変わったところはどこですか？」

というものである。この発問で、子どもたちから出る箇所は次の二つである。

「大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。が、なんと思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。」

「大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対してのような気がしませんでした。」

そして、この二つの場面を、これ以前の場面と比較して、大造じいさんの残雪に対する見方の変容を考えていく。また、そして、この二つのどちらに妥当性があるかを議論させて読みを深めるという授業がよく行われている。

次に紹介するのは、細河小学校五年生のある子どものノートの一部である。

<第一場面> 「なかなかりこうなやつ」「いまいまいしい」「たかが鳥のことだ」「ううむ」「感嘆の声」「たいしたちえをもっているものだな」

<第二場面> 「目にももの見せてくれるぞ」「会心の笑みをもらしました」
『ううん』とうなってしまいました」
<第三場面> 「今年はひとつこれを使ってやるかな」
「うまくいくぞ」
「さあ、いよいよ戦闘開始だ」
「さあ、今日こそあの残雪めにひとあわふかせてくれるぞ」

「再びじゅうを下ろしてしまいました」
残雪のすごさに気づいた
仲間を命がけで助けた
鳥とはいえいかにも頭領らしい
「堂々たる態度」
日本の侍的精神を残雪から感じた
<第四段落> 「ガンの英雄」
「えらぶつ」
「ひきょうなやり方でやっつけたかあないぞ」
「おれたち」 一気持ちのつながり
「堂々と戦おう」
「晴れ晴れとした顔つき」

この子どものノートには、次のような記述もある。

「ハヤブサが残雪をおそったとき、大造じいさんがうつのをやめたのはなぜ」
・ハヤブサも人間もいる中で自らをぎせいにして仲間を助けに行ったこと
に心を打たれたから

このノートを読んでもみると、大造じいさんの残雪への見方を大きく変容させたのは、命がけで仲間を救う残雪の犠牲的精神であったと子どもが読み取っていることがよくわかる。その犠牲的精神を瞬時に感得した表れが銃を下ろした行為であるという読みである（次の段落「残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間のすがたがあるだけでした。」を大造じいさんの心の声と解釈する考えもある）。

このクラスでは、大造じいさんが、この犠牲的行動に出会うことで、残雪への見方を変容させ、尊敬すべき仲間として残雪を認識することができるようになったと物語を読み解き、物語の主題を

この物語は大造じいさんが頭領としての残雪との戦いを通して大きく成長する物語

と考えた。この学習ノートは、物語の主題によく迫った内容になっていると感じた。

2. 小学校の課題を中学校へ引き継ぐ

ところで、学習ノートを見せていただいた担任の先生に、以前から抱いていた一つの疑問について意見をうかがった。それは

第三場面をよく読んでみると大造じいさんが銃を下ろしたときには、まだ、戦いは始まっていません。大造じいさんの残雪像が変容するのは、ここではなく、また最後の「強く心を打たれ」の場面でもないのでは。残雪に対する尊敬の思いは、この間に起こったハヤブサとの死闘と人間との対峙を目の当たりにする過程で、大造じいさんの心に急激に湧き上がってきたものではないですか？ そう考えるとハヤブサとの死闘以降の戦いの描写を詳細に読む必要があるのではないですか？

というものである。これに対しての担任の先生の答えは、次のとおりである。

そのとおりなのですが、この教材は8時間の扱いになってしまい、第三場面の描写の詳細な読みをする時間の確保が難しいです。第一～四場面の情景の説明や大造じいさんの心情の変化を追うことに時間がかかります。第三場面は、描写を読み味わうより、戦いの出来事を確認していくことになります。

確かに、時間がない中で、情景描写の詳細な読みを行うことは困難である。しかし、残雪の戦いの描写を詳細に読むことは、この物語の真髄に迫ることでもある。このように考え、中学校で、小学校での課題を引き継ぎ、発展学習として戦いの描写の読み課題を焦点化し、その読み取りから主題に迫る学習を行うことが意義のあることだと考えた。そこで、次項からは、そのための教材解釈を行っていくことにする。

[3] 「大造じいさんとガン」第三場面の教材解釈

まず、第三場面の物語の構成を確認したい。

1. クライマックスの構成

第三場面のクライマックスは次のように構成されている。

- A おとり作戦の開始
- B 突然のハヤブサの登場
- C 残雪によるガンの群れの危険回避
- D 逃げ遅れたおとりのガンへのハヤブサの来襲
- E 残雪の命がけの再登場（おとりのガン救援）
.....銃を下ろした大造じいさん
- F 残雪とハヤブサとの死闘
- G 第二の敵（大造じいさん）に対する残雪の対峙
.....強く心を打たれた大造じいさん

このようなストーリーで第三場面が進行していくのだが、Eで「銃を下ろした場面」とGで「強く心打たれた場面」について、どちらが残雪の見方が大きく変わったのかという比較は、主題に迫る重要な学習活動であるところまで、私もそう考えてきた。しかし、よく読んでみるとEとGは、比較可能な同次元の心情ではない。Eを検討してみよう。

「大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。」

「ぐっとじゅうをかたに当て」とは、射撃の体勢に入ることを意味する。「ぐっと」＝「じっくり力を込めていく」大造じいさんの意志は残雪を射止めることであった。しかし、その次の瞬間

「が、なんと思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。」

「なんと思ったか」とあるように、その理由は不明であったが、残雪への射撃が突如停止されたことが示される。これは、「下ろしました」＝意志による行為ではなく、「下ろしてしまいました」＝自然と起こった行為と考えられる。実は、大造じいさんのこの行為は、残雪の姿に感動してとった行為ではなかったのだ。

では、大造じいさんは、なぜ、銃を下ろしたのか。それは、狩人としての大造じいさんの経験知からきた残雪の不可思議な行為に対する戸惑いではなかったかと考える。ガンとハヤブサには圧倒的な力の差がある。タニシなどの小動物を餌にするおとなしい鳥類であるガンが、同じ鳥類を餌食にするような鋭い嘴や爪を持つ猛禽であるハヤブサに単独で戦いを挑んだのである。勝ち目はない。な

ぜ、あの優秀な頭領・残雪が無謀な行為の出たのか。大造じいさんには、理解不能なことが目の前に起こった。大造じいさんの行為は、そのことに対する戸惑いではなかったか。(先に述べたように「残雪の目には・・・救わねばならぬ仲間の姿があるだけでした。」を大造じいさんの内心であるという解釈もあるが、私はその考えをとらない)。

つまり、ここでは、大造じいさんの残雪への見方が大きく変わってはいない。しかも、残雪は、まだハヤブサと戦ってはいない。

それでは、Gはどうなのか。

「大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対してしているような気がしませんでした。」

これは、言うまでもなく残雪像が変容したことを言明している心情描写である。ここで大造じいさんは「たかが鳥のことだ」「残雪め」などと評していた残雪のことを「強く心打たれて」「ただの鳥にたいしているような気がしませんでした」と高く評価しているのである。つまり、心情が大きく変化したことが表現されているのは、当然、このGである。

Eは戸惑いであり、Gは感動であり、同じ次元の感情ではない。Eで戸惑っていた大造じいさんがGでは強く心を打たれている。大造じいさんにこの変容を起こさせたのが、残雪の命がけの二つの戦いであった。

ということは、この戦いにおける残雪のどのような姿が大造じいさんの心を大きく揺すぶったのか、その具体的な描写を読み解く必要があると考える。

2. 二つの戦いの描写

その戦いの具体がどのようなものであったのかに移りたい。

まず、残雪にとっての戦いの意味について再度確認しておく

- ・ 仲間を救うための戦い ←安全圏から危険地帯へ
- ・ はるかに戦闘能力の勝ったハヤブサとの戦い ←殺される可能性大

残雪の戦いは二つあった。

【第一の戦い】

まず、第一の戦いFの場面を見てみよう。

最初の攻撃は、残雪からハヤブサに仕掛けられた。しかし、すぐにハヤブサか

ら反撃が加えられる。そして空中戦が繰り返され、両者はもつれあって沼地に落ち、地上でも激しく戦いが続く。このように、双方の一方的な攻撃は一回ずつ。その後は対等の戦いとして描写されている。

その対等な戦いのシンボリックな描写が

ぱっ
ぱっ
羽が、白い花弁のように、すんだ空に飛び散りました。

である。これは、ハヤブサと残雪が空で戦い合ったときの音である。「ぱっ ぱっ」とはどのような様子を表しているのだろうか。考えるヒントは、少し前の場面、ハヤブサがおとりのガンに「一けり」を入れたところの描写にある。

ハヤブサは、その道をさえぎって、バーンと一けりけりしました。
ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。ガンの体はななめにかたむきました。

「一けり」であるから、あの鋭い爪先を持つ足による攻撃であろう。一回の攻撃による羽の飛散を「ぱっと」と表現している。これは、ハヤブサの一方的な攻撃を受けたおとりのガンの被害の描写である。

これに対し、この場面は「ぱっ ぱっ」と表現されている。なぜ、「ぱっと」ではなく、「ぱっ ぱっ」なのか、しかも二行に分けてである。

これには二つの読み方が想定できる。

【A：これは残雪の羽である】

<ハヤブサの残雪に対する猛攻を一気に読む読み方>

体勢を整えたハヤブサ→残雪の胸元へ猛攻→「ぱっ ぱっ」と残雪の羽が何度も飛び散る→そのままもつれあって地上へ落下

体勢を立て直したハヤブサが鋭い嘴や爪先を武器に残雪の胸元に飛び込み、猛攻を仕掛けた。その攻撃は、おとりのガンの時のように一回ではなく連続したものであり、その攻撃を受け残雪は何度も羽を飛び散らせた。その激しさの表現が「ぱっ ぱっ」である。二行に分けて表現しているのは、残雪が受けた攻撃の激しさやその連続性を示している。残雪の深刻な被害状況は後述の「むねの辺りをくれないにそめて」という箇所でも想像することがで

きる。

* 「ぱっ ぱっ」は残雪が受けたハヤブサの連続的猛攻の強烈さを示す
(それでも、残雪は見事に応戦した)

【B：これは残雪とハヤブサ双方の羽である】

＜両者の互角の戦いを行間に読む読み方＞

体勢を整えたハヤブサ→残雪の胸元猛攻→「ぱっ」残雪の羽が飛び散る→残雪の応戦→「ぱっ」ハヤブサの羽も飛び散る→そのままつれあって地上へ

この描写は、どちらか一方の鳥の羽が散っているのではない。まず、最初の「ぱっ」は、残雪の胸元に飛び込んだハヤブサが攻撃を加え、残雪の羽が飛散した様子。それに対し、次の「ぱっ」は、残雪がハヤブサに反撃してハヤブサの羽が飛散した様子であろう（攻撃はこの順序だが、互いに激しく防御をするから、飛散しているのは両者の羽だという解釈も可能である）。二行に分けているのは、「ぱっ ぱっ」が二者のそれぞれの羽であり、瞬時ではあるが、そこには間（ま）があるという読み方である。

* 「ぱっ ぱっ」は残雪とハヤブサの戦いの互角な戦いの激しさを示す

A、Bどちらが妥当かは、授業での子どもの議論にゆだねたい。

また、羽が複数飛散するこの場面は、この戦いが無秩序な殺し合いではなく侍同士の互角な一騎打ち、また、白刃の切り返しのような様式美をもって描かれている。羽の飛散の様子を「白い花弁のように、すんだ空に飛び散りました」と描くのも美しい情景描写である。白い花弁が飛散する背景には、一面のすんだ空＝青色がある。すんだ青のキャンパスに白い花弁が美しく飛び散って、はらはらと舞い落ちていくのである。

死闘の場面にこのような様式美を追求するのはなぜなのだろうか？ 戦いを美しく描くための絶対条件は、戦っているもの同士が対等であること（あるいは弱者が強者に挑む場合が）である。強者の弱者への攻撃は一方的な殺戮描写となる。そこにこのような様式美は成立しない。この戦いにおける様式美の追求は、弱者ガンの強者ハヤブサに対する果敢な戦いであり、ハヤブサもそれを受け、互角に戦っていることを示す効果がある。

以上を整理したものが次の表である。

残雪	両者	ハヤブサ
(攻) いきなり、敵にぶつかって いきました。そして、 あの大きな羽で、力いっ ぱい相手をなぐりつけ ました。		(受) 不意を打たれて、さすが のハヤブサも、空中でふ らふらとよろめきまし た。
(受?) Aの読み：ぱっ ぱっ		(攻) が、ハヤブサもさるもの です。さっと体勢を整え ると、残雪のむな元に飛 びこみました。
	(攻?受?) Bの読み：ぱっ ぱっ	
	(攻?受?) 羽が、白い花弁のよ うに、すんだ空に飛 び散りました。	
	(攻受) そのまま、ハヤブサ と残雪は、もつれ合 って、沼地に落ちて いきました。	
	(攻受) 二羽の鳥は、なお地 上ではげしく戦って いました。	
		が、ハヤブサは人間のす がたをみとめると、急に 戦いをやめて、よろめき ながら飛び去っていき ました。

※ (攻) 攻撃している (受) 攻撃を受けている (攻受) 双方の攻受

また、第三場面での空は、時間の経過にそって次のように変化していることも抑えておきたい。

場面	空の様子	空の色	登場物
おとり作戦開始の朝	東の空が真っ赤に燃えて	赤・青	
群れを率いた残雪の登場	美しい朝の空	赤・青	ガン：白
ハヤブサの急襲	白い雲の辺りから	赤・青・白	ガン：白 ハヤブサ：白
ハヤブサのガンへの攻撃	あかつきの空	赤・青	ガン羽：白
残雪とハヤブサの戦い	すんだ空	青	ガン羽：白 ハヤブサ羽：白

※空や雲を赤・青・白と表現したが、実際は複合的な色である。鳥や鳥の羽も同様で、基調は白だが、グレーや青が混じった色である。なお、教科書の挿絵は、ガンを白基調、ハヤブサを青基調に描いていて、不適切である。

そして、両者は、もつれ合って沼地に落ちていき、さらに地上ではげしく戦った。そして、最後に、その場にかけてきた大造じいさんを認識したハヤブサの逃亡で戦いの幕は下りる。これは、仲間を救った残雪の勝利といってもよい。しかし、残雪はハヤブサの鋭い嘴で胸元を抉られて瀕死の状態であった。

【第二の戦い】

続いて、残雪にとって第二のおそろしい敵との戦い（対峙）が開始される。

大造じいさん	残雪
大造じいさんはかけつけました。	<u>むねの辺りをくれないにそめて、ぐったりとしていました。</u> しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、 <u>残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げました。</u> そして、じいさんを <u>正面からにらみつけました。</u> それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでした。
大造じいさんが <u>手をのぼしても</u> ・・・ 大造じいさんは、 <u>強く心を打たれて、</u>	・・・もう、じたばたさわぎませんでした。それは、 <u>最期の時</u> を感じて、 <u>せめて頭領としてのいげんをきずつけ</u>

ただの鳥に対してしているような気がし ませんでした。	まいと努力しているようでした。
-------------------------------	-----------------

ハヤブサの攻撃で深手を負った残雪は、胸の辺りをくれないに染めていた。しかし、第二の敵を認めると、ぐっと長い首を持ちあげ、正面からにらみつけた。きりっとした長い首は、ガンの頭領のシンボルのようである（それは、第四場面で快癒した残雪を「あの長い首をかたむけて」と描いていることからわかる）。

大造じいさんは、この残雪の姿に「頭領としての堂々とした態度」「頭領のいげんを傷つけまいと」する態度に強く心を打たれたのである。

大造じいさんの心の変容は、その行為からも読み取れる。いまましい敵だった残雪に銃弾を打ち込むのではなく、ここで大造じいさんは「手をのばして」いるのである。国語教育の先駆的实践者は、ここに注目し「大造じいさんが手をのばした時の、手のひらは上を向いていましたか、下を向いていましたか」という発問を行った。上から手を出し、残雪をつかまえようとしたのか、下から抱き包むように手を差し伸べたのかということを考える優れた問いである。

このようにEとGの間に起こった二つの戦いの描写を丁寧に読み解くことが、

○残雪がハヤブサと対等に戦ったこと

○残雪が死を覚悟しながらも自分の誇りを失わずに堂々とした態度をとって人間と対峙したこと

○それに対し、大造じいさんが強く心打たれたこと

を読み解くことになるのである。

[4] 中学版「大造じいさんとガン」授業づくり資料として

—小六体験授業での実践記録—

Ⅲの読みをもとに行った小学校六年生体験入学の体験授業「大造じいさんとガン」の授業を報告する。この報告は、今後検討する中学版「大造じいさんとガン」の授業の参考資料とするものである。

1 授業のねらい

授業でめざしたのは、「仲間を救うために、圧倒的な力の差のあるハヤブサに挑んだ残雪の戦いとこの場面を目の当たりにした大造じいさんの心情の変容を、戦い描写から読み解いていくこと」である。

しかし、三十分という時間の制限から、大造じいさんの心情の変化を考えるこ

とは今回行わず、戦い描写の読みに焦点化し、次のようにねらいを設定した。

残雪とハヤブサの戦いの描写の具体をイメージする

2 学習の方法

学習の方法は、描画&はてなである。これは、物語のある場面や俳句・短歌を絵画化することを通して、描写の内容を具体的にイメージしていく方法である。この学習は三つの段階で構成される。今回の場合は、次のような展開が考えられる。

- 第一段階 「物語の〇〇の場面を絵にします。」という提示
- ・子どもは、この提示で「えっ、絵にするの？ 困ったな。」という反応をとる。
- 第二段階 「困りましたね。では、この場面を絵にするための『はてな』を見つけましょう」という指示
- ・絵にするためには、教材の叙述からさまざまな「はてな」を見つけていく。
 - 基本はてな・・・時：時代は？ 季節は？ 一日のうちいつ？
場：話の舞台はどんなところか？
人：登場人物は？
 - 具体はてな・・・時・場・人が設定できれば、その具体のイメージを探るはてなを見つけていく。
 - a：見えるもの（視）
 - b：聞こえる音（聴）
 - c：におい（匂）
 - d：肌の感触（触）
- ☆例えば、次のようなはてなが想定できる。
- a：空に見えるものは？ ・空の色は？
 - b：戦いのとき聞こえる音は？
 - c：大造じいさんが感じた匂いは？
 - d：肌で感じる気温や感触は？
- 第三段階 「今、みんなが見つけた『はてな』の答えを文中の描写から見つけるとどんな絵を描けばよいかわかっていきます。」と指示し、一つずつ「はてな」の答えを文中から見つけていく。

※描画&はてなは、絵を描くことが目的ではなく、絵を描くために叙述を丁寧に読み、描写から具体的な場面のイメージを読みとらせることにねらいがある。言い換えると、漠然と読むのではなく、読みの必然性を導き出すためのだてである。

しかし、この描画&はてなも、今回三十分の授業であるため、子どもからの「はてな」は断念して、授業者から「はてな」を出し、それを解決する授業を行った。戦いの場面として焦点化したの「ぱっ ぱっ」である。

「ぱっ ぱっ」は何の音ですか。そして、誰の（あるいは誰と誰の）音ですか？

3 授業の実際

体験授業は平成二十七年一月十九日に本校東棟二F第一理科室で実施した。受講者は、伏尾台小学校六名、細河小学校五名（男六名・女五名）であった。

まず最初に授業の冒頭で、第三場面を絵にするという学習課題を提示し、全員で本文を読んだ（マル読み）。学習の範囲は、大造じいさんがおとり作戦を開始する朝の場面から、残雪とハヤブサがもつれれ合って地上に落ちる場面までである。

「さあ、今、読んだ場面の後半、残雪とハヤブサの戦いを絵にすると言いましたが、絵にすると言われて、困ったなあと思った人は手を挙げてください。」
全員が手を挙げる。

「全員ですね。困ったことを、困ったと言うのはとってもいいですよ。では、何が困ったか、言ってください。」

「残雪とハヤブサの戦いがどういうふうに行われたかがわからない。」

「残雪がハヤブサを攻撃しているのを描くのか、ハヤブサが残雪を攻撃しているのを描くのかかわからない。」

「そうですね。いいことに気づいたね。」

また、このような発言もあった。

「絵を描くのが苦手だから。」

「絵は得意、不得意がありますから、気にしないで大丈夫ですよ。」

そう答えて、いよいよ課題に入った。

「今日、絵にする場面は、今読んだところの中で、残雪とハヤブサが空中で戦うところです。この場面を絵にするには、今から黒板に書くところがよくわからないと描けません。よく考えてみましょう。」

こう言って、黒板に次の一文を書いた。

ぱっ
ぱっ
羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。

そして、

「このなぞ（はてな）を解決すると絵が描きやすくなります。では、始めます。

『ぱっ ぱっ』とは何を表しているのですか？」

と聞いた。これについて、四、五人の手が上がった。一人の女子を指名すると

「残雪の羽が散った様子。」

という意見だった。

これと違う人を尋ねると

「残雪とハヤブサの羽。」

という意見が出た。

「これは、大切な問題です。この『ぱっ ぱっ』が残雪のものなのか、はたまた残雪とハヤブサのものなのかは絵を描くのに重要な問題です。この羽が残雪のものだという人は、プリントに○、違う人は×を書きなさい。」

○×で挙手をさせると、○は二人、×は九人だった。そこで、その理由をプリントに書かせた。次にそれぞれの理由を聞いた。

<○の意見>

この場面の前に『が、ハヤブサも、さるものです。さっと、体勢を整えると、残雪のむな元に飛び込みました。』とあり、ハヤブサが残雪の胸もとに突っ込んでいったことがわかる。そこで、残雪の羽が飛び散ったと思う。

<×の意見>

- ・この文のあとに「残雪はそのまま、ハヤブサと残雪は、もつれあって、ぬま地に落ちていきました。」とあるから、両方がやりあっている。」
- ・この文の前に「いきなり、敵にぶつかっていきました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい相手をなぐりつけました。」とあって、残雪も最初にやっているから、対等に戦っている。

両派このような意見だった。両派に「残雪とハヤブサは対等に戦っていますか？」と聞くと両派とも対等という意見だった。

実は、ここからが両派の読みの妥当性を検討するべき場面だったが、すでに三十分が過ぎてしまった。そこで、最後に用意していたガンとハヤブサの写真をパワーポイントで見せた。下記のものであるが、これらの写真は、ガンとハヤブサが両方とも白い羽を身につけている（つまり、白い羽という理由で羽が残雪のものであるとはならない）こと、ガンに対しハヤブサは鋭い嘴と爪先を備えている（対等に戦っているが、本来ハヤブサのほうが圧倒的に強い）ことに気づかせるために作成したものである。最終的に、時間切れで描画は宿題にした。



【pptの写真画像】

左上：ガン <http://ja.wikipedia.org/wiki/雁>

右上：ハヤブサ <http://www.geocities.jp/wbwner23/html/out-falcon/frm5019.html>

左下：ハヤブサの嘴と爪先 <http://pixabay.com/ja/%E7%8D%B2%E7%89%A9%E3%81%AE%E9%B3%A5%E9%B3%A5%E8%87%AA%E7%84%B6%E3%82%B7%E3%83%AD%E3%83%8F%E3%83%A4%E3%83%96%E3%82%B5%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%AB%E3%82%AF-188827/>

右下：同 嘴 <http://www.ne.jp/asahi/hayabusa/izumiotsu/falcon16000/frame.htm>

【描画：絵の横の記述は○×の理由】



○派：ハヤブサが残雪にこうげきしたのは頭だから、羽や胸元のように羽は散らないと思うから

○派：ハヤブサが頭から突っ込んだから頭に羽はついていないと思うから

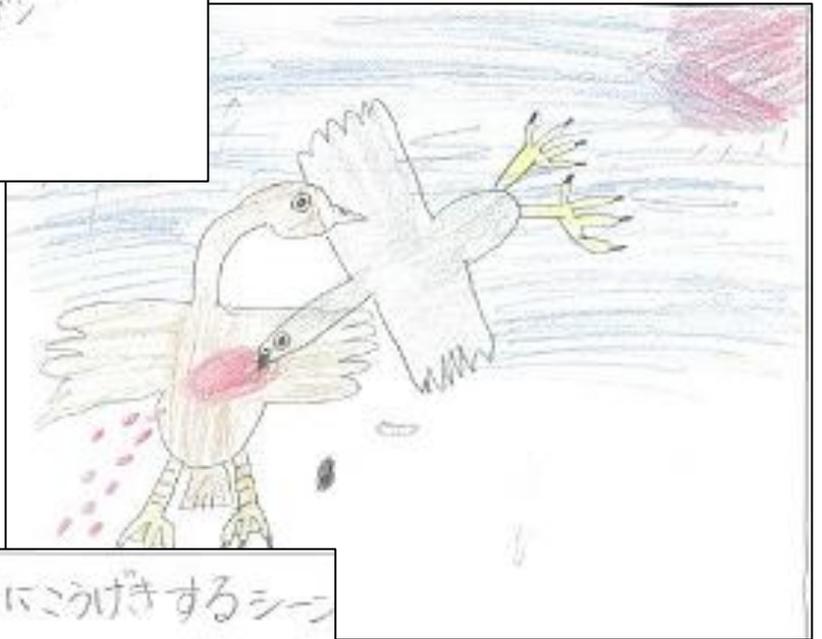


×派：ぱっ ぱっの前の言葉でもはげしく戦っているのが分かるので両方

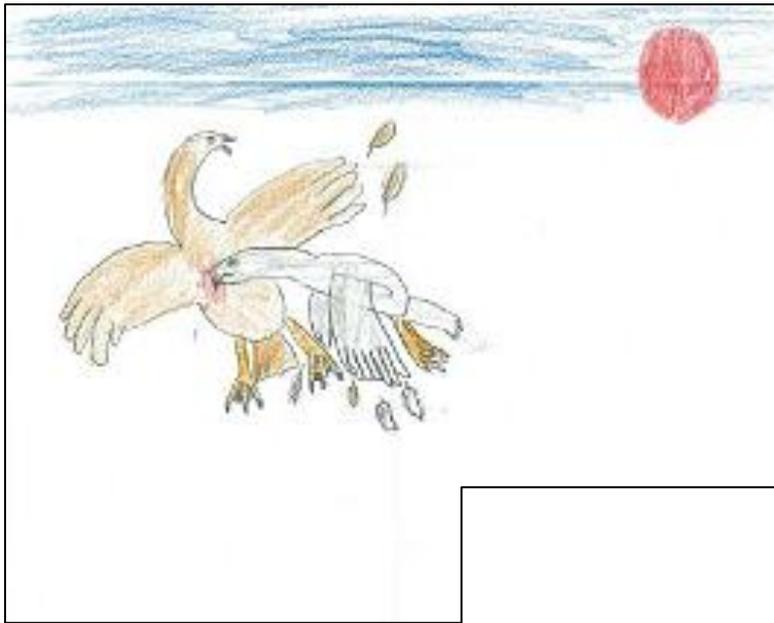


×派：もつれあってと書いてあるから攻撃された残雪は何らかの抵抗をしてハヤブサ（と）もつれあったと思うから両方の毛がぬけた。

×派：次の文に、もつれあって、落ちていったと書いているから

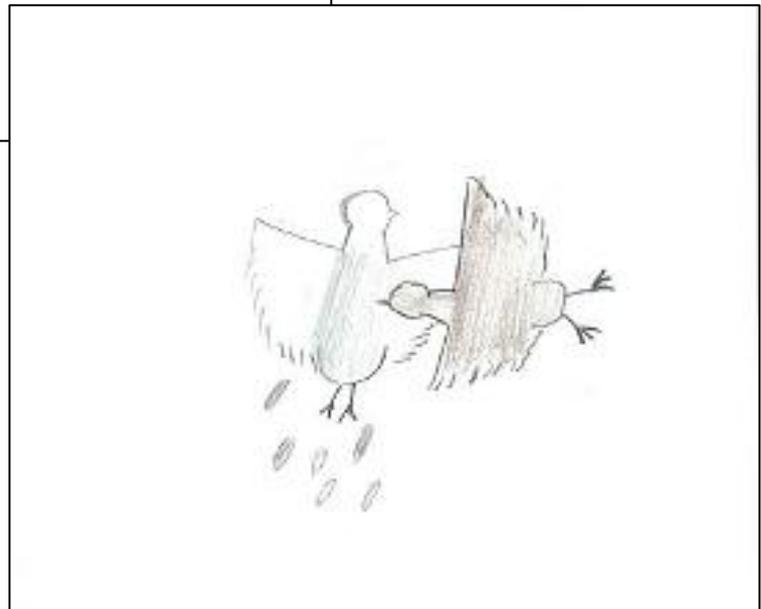


×派：「羽が……飛び散りました。」の後に、ハヤブサと残雪はもつれあって」と書いているから両方だと思う。



×派：残雪のむね元に飛びこんだとしてもその時に羽がぶつかったり、もしくはちょっとした攻撃があたった。

×派：ぶつかった次にハヤブサと残雪はもつれあっているので二羽がもつれあっている時に二羽の羽が飛び散った。



4 授業の振り返り

この授業は、対象が六年生であり、三十分の体験授業という特殊な形態であったが、中学版の授業を構想するためのヒントをいくつも与えてくれた。

- 三十分という制限があったため発問を教師が行うことにしたが、やはり、子ども自身が「はてな」を発見して授業をすすめることがきわめて重要であることを再認識した。
- 「ぱっ ぱっ」の読みとりに関して、次のような改善点が考えられる。
 - ・「ぱっ」を「誰の」という主体は問題にせず、まず「羽が飛び散る様子」であることを確認する。
 - ・次に、最初①の「ぱっ」と次②の「ぱっ」は同じ羽か、そうではないのかを

考えるのに、どのようなパターンがあるか考えさせる。

- | | |
|---|-------------|
| A | ①②残雪 |
| B | ①②ハヤブサ |
| C | ①残雪⇒②ハヤブサ |
| D | ①ハヤブサ⇒②残雪 |
| E | 残雪とハヤブサ①②同時 |

- ・ A～Eのどれに当たるかを考える際に、ここより前の場面で「ぱっ」が出てくる場面「ハヤブサは、その道をさえぎって、バーンと一けりけりしました。ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。ガンの体はななめにかたむきました。」の「ぱっと」と「ぱっ ぱっ」の違いを比較する。
 - ・ 「ぱっと」直前の記述から「ぱっと」は、おとりのガンがハヤブサからけりを入れられて、散らせた羽であることを確認する。
 - ・ 「ぱっ ぱっ」の最初の「ぱっ」は、ハヤブサが残雪の胸元に飛び込んだ直後の「ぱっ」であるから、残雪の羽であると考えてもよい。
- 次の「ぱっ」は、

さらに攻撃を加えられやられた残雪の羽	なのか
残雪の反撃によるハヤブサの羽	なのか
双方	なのか

を考えさせる。残雪がハヤブサと対等に戦っているなら二つ目はハヤブサ、そうでないなら二つ目も残雪である。

- ・ 授業では、飛び散った羽が残雪のものと考えた子どもも両者のものと考えた子どもも両者の戦いは対等であったと答えた。そう考えた理由を本文中の表現を根拠に説明させる必要がある。上述してきた内容を子どもの声で説明させたい。
- ・ この「ぱっ ぱっ」の読みをもとに、本来、対等ではないハヤブサに命懸けで挑んでいったのはなぜかを再確認する⇒仲間を助けるための犠牲的行為

残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間のすがたがあるだけでした。

- ・ 最初、残雪の行動に対し戸惑っていた大造じいさんが、戦いを目の当たりにして、その行動の意味を瞬時に理解したことを押さえる。

おわりに

今後、縷々述べてきたことをもとに、中学版「大造じいさんとガン」の授業を構想していくための要点を整理して本稿を終える。

「大造じいさんとガン」の主題である大造じいさんの残雪像の変容を、行為の変化に着目し、そのクライマックス第三場面「①残雪とハヤブサとの戦い」「②残雪と人間との戦い」との「戦い描写」を読み解くことで理解していく

- 「戦い描写」を詳細に読み解くために次の二点に焦点を絞る。
 - ・ハヤブサとの戦い＝「ぱっ ぱっ」
 - ・人間との戦い ＝「じいさんを正面からにらみつけました」
- 「戦い描写」から大造じいさんの心情の変容を読み解くために次の点に焦点を絞る。
 - ・大造じいさんの行為＝「大造じいさんが手をのばしても」
- 上記二つの学習を進めるために「戦い場面」の描画あるいは「大造じいさんの行為場面」の描画を行う。描画のために「はてな」を活用する。



【学習内容】二つ戦い描写の詳細な読解
それを見た大造じいさんの行為の
変容の読解
【学習方法】描画&はてな

